

〔報告〕

新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価 －学生アンケート結果から－

太田 晴美¹⁾, 大崎 真¹⁾, 早坂 笑子²⁾

1) 東北文化学園大学医療福祉学部看護学科 2) 前・南東北病院

要旨

新型コロナウイルス感染症の流行により、医療系学生の臨床実習を中止せざるを得ない状況となった。A大学統合看護実習も、臨床での実習を中止し、学内実習を行った。実習目的等を変更せずに、個人面接、オンデマンドで臨床経験を聞き、対面で学修、自己課題に取り組んだ。終了後の学生アンケート結果から、学生は面接により内省できた(96%)、他者の経験から学びを得た(99%)、臨床看護を知ることができた(96%)と答えていた。また、94%が卒業後の自分をイメージし、97%が自らの学修課題に取り組むことができたと答えていた。実習態度の自己評価は平均3.95/5点、満足度は平均4.28/5点と評価していた。

しかし、看護技術や、コミュニケーション等、臨床経験不足は否めず、医療機関とコロナ禍の実習方法並びに、継続教育について連携強化する必要性が示唆された。

【キーワード】新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)、統合看護実習、学内実習、ICT活用、学び

I. はじめに

看護基礎教育の指定規則は社会の変遷とともに改正が行われている。平成20年(2008年)第4次改正において、看護の統合と実践分野が創設された。統合看護実習で行うべき内容について、厚生労働省看護基礎教育の充実に関する検討会報告書(2007)では「専門分野での実習を踏まえ、実務に即した実習を行う。複数の患者を受け持つ実習を行う。一勤務帯を通した実習を行う。夜間の実習を行うことが望ましい」とあげている。これに基づき、全国の看護基礎教育機関では統合看護実習を行うようになった。

統合看護実習は、教育機関毎の裁量によって形式、方法、学生配置、達成状況などが異なり、未だ実習内容を模索している状況にある。その形態は複数患者受け持ちを主体に行う、看護管理を重

視する、基礎教育と臨床の乖離を防ぐ工夫をする、領域毎に学生を配置し目標を設定して行う、学科全体で取り組むなど、様々である。

A大学統合看護実習は、4年通年科目として2単位90時間の必修科目で2週間の病院実習を行っている。

2019年末に中国武漢で発生した新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)の世界的な流行により、WHOは、2020年3月11日にパンデミックを宣言した。わが国でも、10月5日付(厚生労働省、2020)発表では86,047名が感染し、1,602名(空港検疫、チャーター便帰国者事例含む)が死亡している。2020年2月以降感染者が増加し、4月7日から5月25日まで緊急事態宣言が発出された。医療機関ではCOVID-19患者の対応だけでなく、通常診療の中止や変更、面会制限等の危機

管理対策が一層求められている。

2020年2月28日に厚生労働省（厚生労働省，2020）は、COVID-19の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所、および養成施設等の対応について「実習中止、休講等の学生で修学の差がない配慮を行うこと、実習施設の変更、年度をまたぐことを検討しても代替が困難な場合、実情を踏まえて学内実習等で知識技術を修得することとして差し支えない」と事務連絡を発出した。

これを受けA大学では、実習施設並びに近隣医療機関状況を確認し、感染拡大状況、緊急事態宣言等を検討した結果、前期の臨地実習は学内実習で行うこととなった。

2020年度のA大学統合看護実習は、学生を3クールに分けて、6月中旬から7月末に7施設で行う計画だった。しかし、学内閉鎖等により、4年前期の臨地実習スケジュール調整を行わなければならなかった。臨地で統合看護実習を行う検討をしたが、4年次の実習で年度を超えることができない状況、臨地実習先を確保できないことから、臨地実習を断念し学内実習で行うことになった。

2020年9月に統合看護実習の目的を変更せずに、学内外の人的資源並びにA大学で利用しているICT教育システム(Google Classroom[®]:以下、クラスルーム)を活用し、統合看護実習を行った。

学内統合看護実習の準備・実施、並びに学生の主観的な評価を記録に残すことは、収束の目途が立たない新型コロナウイルス禍の学内実習による教育を構築する上で意義がある。

II. 研究目的

学内で行った統合看護実習終了時の学生アンケートから、学内統合看護実習を評価し、今後の課題について明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究対象

A大学看護学科4年生で、統合看護実習受講学生80名のうち回答が得られた79名(回収率

98.7%)。

2. データ収集期間

2020年9月18日～9月25日

3. データ収集

Google forms[®]を利用した無記名アンケートで行い、自由意思による回答とした。

4. 主な質問事項

4つの観点で、主な質問項目は以下の通りである。

①実習進行に役立てたもの

②学内実習内容

初回面接での自己の振り返り、音声課題の学び、多重課題・タイムマネジメント、臨床の看護を感じとる。

③実習の取り組み

不足している学修課題の取り組み、自分の振り返り、卒業後の自分をイメージ、実習中の教員との関わり方、受講態度。

④実習評価

実習満足度、実習の良さ、実習の改善点、その他。

なお、質問の回答は、利用した内容が複数あるものは複数回答、到達状況を問う設問は4択、できた・できないの判断を問う設問は2択、態度・満足度は5段階、その他自由記述式を用いて回答を得た。

5. データ分析

選択問題は単純集計し、自由記述は類似する内容を研究者間で検討し、内容分析を行った。

6. 倫理的配慮

本調査は統合看護実習最終日、全体ミーティング終了後に、学生に口頭とアンケート用紙で①個人の特定はしないことを保証、②成績には一切の関係がない、③回答は自由意思で断っても不利益がない、④調査目的・内容を理解し提出をもって同意とみなす、⑤データはパスワードをかけロック付きのUSBに保存する、⑥データは質問対応のため5年間は研究代表者研究室のカギのかかる書庫に保管し、5年後に粉碎破断、⑦結果は東北文化学園大学看護学科紀要、看護系学会、他施設

との学内実習検討等で公表することを説明した。

本報告は緊急性を有するため学生と東北文化学園大学医療福祉学部看護学科長の許可を得て公表する。なお、開示すべき COI 関係はない。

IV. 実習概要

1. 平常時の統合看護実習について

1) 実習概要

(1) 実習目的

大学の講義、演習並びに領域実習体験に基づき、病院等で複数患者受け持ち等の多重課題を通して、チームアプローチの重要性を学ぶ。

(2) 実習目標

- ①既習の知識・技術を統合・活用し、患者ケア実践を行う。
- ②ケア実現のマネジメント能力を養う。
- ③医療チームの一員として看護（看護学生）の役割を遂行する。
- ④看護師の倫理綱領を遵守し、保健医療専門職として責任ある行動ができる。
- ⑤大学での学びと自己の看護観、および今後の自己課題を明確にする。

(3) 実習単位：2 単位 (90時間)

2) 実習指導

(1) 担当教員

看護学科全教員より担当教員を選出した後、教員説明会を複数回開催し、必要に応じて個別に教員と打ち合わせを実施し準備を行う。

実習中は、1 施設に主たる担当教員 1 名と、副担当教員 1 名が学生の直接指導を行い、科目責任者は看護部との調整、学生状況確認、巡回等を行う。

実習終了後は、科目責任者が担当教員から実習状況（学生、施設の指導等）の聞き取りを行う。

(2) 実習施設

2 月に A 大学で臨地実習指導者会議を開催し、各施設の指導者と、当該年度の振り返り、意見交換を行う。

4 - 6 月に看護部との打ち合わせ、その後病棟での臨地実習指導者・看護師長との指導者会議、実習終了後に看護部に実習報告を施設で行っている。

3) 実習内容

(1) オリエンテーション

実習要項に基づき、統合看護実習説明を 4 ~ 5 月に実施し、実習誓約書を記載し提出する。

(2) 学内演習：事前、直前、最終の 3 回

- ①事前：自己目標の立案（科目責任者）
- ②直前：病院オリエンテーション、担当教員に自己目標並びに事前学修提出
- ③最終：実習病院・病棟の良さを言語化し、他施設との共通点、相違点に着目しディスカッションする。

(3) 病院実習

① 複数患者受け持ちまたは多重課題

病棟特性、学生のレディネス等から総合的に判断し、複数患者受け持ちまたは一人の患者受け持ちで、多重課題（優先順位の判断）やタイムマネジメントを意識化して行う。

② 夜間実習・遅番 19 時まで

夜勤勤務者の役割、日勤から夜勤への申し送り、昼から夜にかけての患者の変化等を知る。限られた看護師で、多数の患者対応と優先順位の判断、看護師間の協働の実際を学ぶ。

③ 病院・病棟を知る

病院・病棟オリエンテーション、組織体制や安全管理等を学修する。

看護管理実習（半日～1 日）、管理者の役割や、業務内容、管理哲学等を説明とシャドウイングを通して学ぶ。

実習する病棟に関連した他職種連携や医療チーム・委員会活動の見学を通して学ぶ。

④報告会

中間報告会は立案した自己目標の進捗状況・目標修正を指導者、担当教員に報告する。アドバイス等を受けて実現可能な目標となるよう再修正を行う。

最終報告会は、実習最終日に自己目標の振り返りと実習終了後の目標を指導者、担当教員に報告し総括する。

2. 2020年度学内での統合看護実習

1)実習概要

目的・目標、実習時間数を変更せずに、実習形態を見直した(表1)。実習は① Google

Classroom を利用した音声課題(以下音声課題)

②対面学修、③面接、④自己学修で構成した。

2)実習時期

他の領域実習が終了後、9月7-18日に80名一斉に行った。

3)実習内容

学内実習では、感染予防に留意しパソコン利用が可能な教室及び、広い講義室を確保し、分散実習ができるようにした。

看護管理学領域教員が科目責任者となり、基礎看護学領域助教、統合看護実習指導に携わっていた元看護師長の非常勤講師の3名で学内実習を主担当した。面接や音声課題、対面講義演習は、主

表1 統合看護実習目標、臨地・学内実習内容対比表

| 目標 | 臨地における実習内容 | 学内における実習内容・方法 | |
|--------------------------------------|--|---|-------------------------------|
| 1. 患者ケア実践を行うために既習の知識・技術を統合する | <ul style="list-style-type: none"> 不足知識・技術を自己学修 対象・ケアの根拠を理解し実践 安全管理とQOLを考慮したケア | <ul style="list-style-type: none"> 知識、技術の習得状況を確認・学修 QOLを考慮したケア *安全管理は目標3に包含 | 自己学修 音声課題 |
| 2. ケア実現のためのマネジメント能力を養う | <ul style="list-style-type: none"> 指導看護師と協働で看護ケア実践 優先順位判断 情報収集、情報共有、報告、連絡、相談、申し送り 遅番 | <ul style="list-style-type: none"> 複数患者看護・多重課題 行動計画を立案、優先順位検討・修正 情報確認、報告連絡相談 夜勤看護 | 対面実習(DVD・紙上・ディスカッション) 音声課題 |
| 3. 医療チームの一員として看護(看護学生)の役割を遂行する | <ul style="list-style-type: none"> 医療安全、インシデント対応 リスク管理、情報管理 他職種連携、チーム医療実践 看護管理、リーダー・メンバーシップ 実習病棟の特徴理解、説明 協働活動、学内演習 | <ul style="list-style-type: none"> 医療安全 インシデント・アクシデント報告 感染対策の実践 他職種連携、チーム医療の実践 看護管理者の役割、働き方 アサーションスキル 他者(教員)に関心を持つ | 対面実習(ディスカッション) 音声課題 |
| 4. 看護師の倫理綱領を遵守し、保健医療専門職として責任ある行動ができる | <ul style="list-style-type: none"> 個人情報、病情報守 プライバシー保護 ケアのインフォームドコンセント 医師の病状説明に同席し、自己決定を支援する関わりの実践を見学 | <ul style="list-style-type: none"> 個人情報の取り扱い インフォームドコンセントの実際 保健医療福祉専門職・社会人としての態度・マナー | 対面講義 全体ミーティング |
| 5. 大学での学びと自己の看護観、および今後の自己課題を明確にする | <ul style="list-style-type: none"> 自己目標の立案、中間、最終評価 自己成長と課題の記述 自己の看護観や、目指す看護師像、モデルとなる看護師の姿を記述 | <ul style="list-style-type: none"> 自己目標(キャリアビジョン含む)の立案、実施、修正 初回面接、中間面接、最終面接 看護の魅力、看護のキャリア 自己の看護観 | 面接 音声課題 対面講義 |

担当に加え19名の教員が指導した。

学生に、学内で実習を行う意義は、教員と積極的に接点を持つことで、多様な経験を活用できると繰り返し伝えた。

また、午前・午後に全体ミーティングを行い、修正点や注意点等を伝えた。学生は午後のミーティング終了後、1日の行動並びに実習終了時刻18時までの行動予定を教員に報告した。

(1)音声課題

実習初日に、17本の音声課題を一斉に提示し、学生自身が、いつ、どの音声課題に取り組むか行動計画を立案した。各音声聞いて、その学びや質問をクラスルーム上で提出し、学修を進めた。学生の進捗状況を確認しながら実習3-4日目に追加音声4本アップし、多重課題とタイムマネジメントを実施できるようにした。

音声課題は1本4分30秒から32分で、概ね25分程度の音声をインタビュー形式(一部、単独録音)収録した(表2)。

①実習導入

実習の動機づけを行うため、卒業生(看護師1年目)2名の音声を聞き、学びを実習2日目までに提出とした。卒業生の実習導入音声はタイムマネジメントの仕方や、研修報告や記録の大切さ、自己課題や目標設定、大学時代の実習行動計画と臨床での違いなどを語っていた。

②キャリア

臨床看護師として働いていた当時、妊娠出産を経験し、現在も子育て中の教員に仕事と子育てをテーマにインタビューした。

また、新人看護師からプリセプターになるまで、プリセプターとして大切にしていたこと、看護師として就職後、希望部署に配属にならなかった、成長の過程で悩んだ経験、看護師を経て現在教員として働いている経験を収録した。

さらに、将来を見据えて、災害看護専門看護師に、専門看護師になる経緯や進学、資格取得に関することをテーマに、遠隔でインタビューを行った。

表2 クラスルームによる音声課題

| テーマ | 内容 | 担当 |
|-------|------------|----------------|
| 実習導入 | 卒業生(1年目)現在 | 卒業生2名 |
| キャリア | 子育てと仕事 | 教員1名 |
| | 新人~中堅看護師経験 | 教員2名 |
| | 災害専門看護師 | 専門看護師1名 |
| | 現在までのキャリア | 教員2名 |
| 看護の実際 | 夜勤 | 教員2名 |
| | チーム医療 | 教員 外来看護師長 |
| | 忘れられない看護 | 教員3名 |
| 看護管理 | 看護師長 | 教員1名 |
| | 看護部長 | 教員1名 看護部長1名 |
| 患者・家族 | 患者経験 | 教員1名 |
| | 家族から見た看護 | 教員2名 |

③看護の実際

若手の教員が臨床で実践していた夜勤の流れと夜勤時看護師の役割を個々の経験に基づいて収録した。

また、チーム医療は実習経験や、学生にとってイメージすることが難しい透析看護を教員に、外来看護を現職の外来看護師長に語っていただき収録した。

さらに、看護を語ること、看護の魅力を感じ看護観を醸成すること、他者の知見から学ぶために、臨床での忘れられない看護を教員に伝えてもらった。

④看護管理

看護師長経験、看護部長経験のある教員に管理者の役割や管理者になった経緯と管理者の一日の動きなどを収録した。

また、現職の看護部長に外部評価(医療機能評価やISO等)を看護にどのように活かしているか、看護部理念・方針などを含めた管理者としての管理哲学を遠隔でインタビューし、収録した。

⑤患者・家族

教員自身が患者として入院手術を受けた際の患者の気持ち、ご家族が入院し看取った経験から看護師との関わりについて、収録した。

(2)対面学修

①医療安全

医療安全は、インシデント・アクシデントの実際例をもとに、教員（基礎看護・看護管理・看護師長経験のある統合看護実習非常勤）3名でディスカッションを行った。

その後、学生を交えて全体討論を行った。学生は教員からインシデントの経験が、その後の自分にどのように役立ったか、精神看護領域で起こりうる事故など、経験に基づいた話を聞くことができた。

医療を安全に提供するには、看護師の仕事は生命に直結するという怖さを知り、注意深く対応することや、安楽・安全・安心の重要性についてディスカッションした。

学生自身が自己を振り返り、自分の傾向から起こしやすいインシデントを想定し、インシデント・アクシデント報告書を記載して、提出した。また、医療安全は報告で終わらせずに組織的な対応の必要があるため、学生が管理者（または医療安全管理者）役割を想定し、インシデント・アクシデント報告書（管理者用）を記載して提出した。

②アサーション

精神看護領域教員から、看護職は患者だけではなく、共に働く仲間など、人とかかわる仕事であり、相手も自分も大切にできるコミュニケーションを図ることの重要性について講義した。実習目標「医療チームの一員として看護（看護学生）の役割を遂行する」ために、学生は自己のアサーション傾向を分析し、事例をもとにアサーティブな対応をワークした。

③看護管理・看護の魅力

担当教員が対面で自らの看護実践、看護のやりがいや魅力を伝え、看護師が“看護を語る”こと

の必要性について説明した。また、看護管理は管理者が行うだけではなく、看護師一人一人が自己管理することの重要性を伝えた。さらに、クラスルームで提出された学びを確認し、他者の経験からの学びを、自分の学びにつなげる必要性等を補足した。

④複数患者受け持ち・多重課題

同時多重課題時の優先順位について、資料を基に自己学修し、他学生の意見を聞く。DVDで複数患者受け持ちや多重課題状況を視聴した。DVDを途中で止め、“この場合、看護師の自分だったらどうするか？”、“師長の立場でどうするか”など、教員がデモンストレーションを行いながら進めた。

(3)面接

面接は、大学生活を振り返り、自己の知識技術習得状況を確認し、自己目標（短期・長期的な）と計画を立案できる、他者に関心を持つことができる、効果的なプレゼンテーション、マナーを実践できることを目的に、個別に初回面接・最終面接を一人20分ずつ行った。

①初回面接

初回面接はスケジュールに基づき学科内教員（8名）が担当し、1対1の個別面接を15～20分間実施した。面接内容は、学生自身が自己目標記録に基づき、大学生活での学び（知識・技術）、何ができて何が不足しているか、将来目標と計画をプレゼンテーションした。

面接する担当教員に関心を持ち、教員に対して質問し、ディスカッションを行った後に、教員からフィードバックをその場で受けた。

②最終面接

最終面接は、統合看護実習最終日から6日間にわたり、科目責任者と1対1で20分程度行った。面接内容は、最終面接資料を用いて、初回面接で受けたアドバイスを踏まえ、意識したこと、統合看護実習中の取り組み、自己の将来像（キャリアビジョン）に関して学生がプレゼンテーションを

行った。

また、学生自身が統合看護実習中に行った自己課題（大学での学びで不足している知識学修等）について、自己の学修方法や工夫、成果を持参し、プレゼンテーションに追加した。

面接を担当した科目責任者は、既に提出している記録、クラスルーム課題等を学生と共に確認しながら、フィードバックを行った。フィードバックは実習終了後の看護師としての学修継続動機を高めるために PNP 法（positive negative-positive）を用いて行った。

V. 結果

Google forms[®] による無記名アンケート。2020 年度 A 大学看護学科 4 年生で、統合看護学実習受講学生 80 名のうち回答が得られた 79 名（回収率 98.7%）。

1. 実習進行に役立ったもの（複数回答）

統合看護実習では学生の自律的な計画・行動をもとに行う、課題の取り組み、タイムマネジメント、COVID-19 対応による変更点等の諸連絡を行った。

日々、学生が実習を行うにあたり、実習進行に役立ったものとして、実習要項、クラスルーム掲示板、実習オリエンテーション、朝・夕の全体ミーティング、教員と直接話すについて、半数以上が役立ったと答えていた（図 1）。

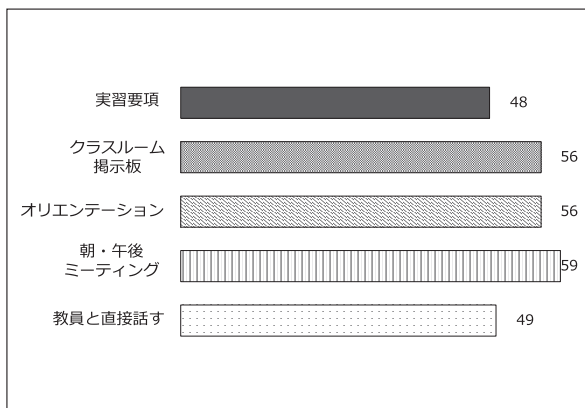


図 1 実習進行に役立ったもの（複数回答可） n=79

2. 学内実習内容

1) 初回面接で自己の振り返り（4 択）

初回面接で自己の振り返りを大いにできた 44%（41 名）、できた 52%（35 名）で、あまりできなかった 4%（3 名）と回答した。学生は、初回面接で自己を振り返り、気づきがあった（図 2）。

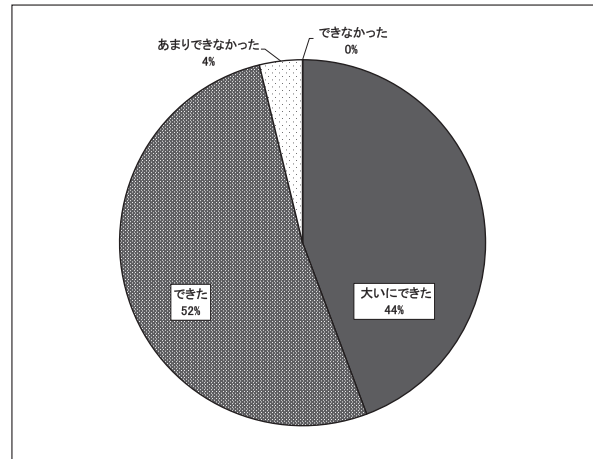


図 2 初回面接で自己の振り返り n=79

2) 音声課題の学び（4 択）

教員、現役の看護師の 21 音声課題は、大いに学びがあった 74%（58 名）、学びがあった 25%（20 名）、あまり学びがなかったと答えたのは 1%（1 名）であった（図 3）。

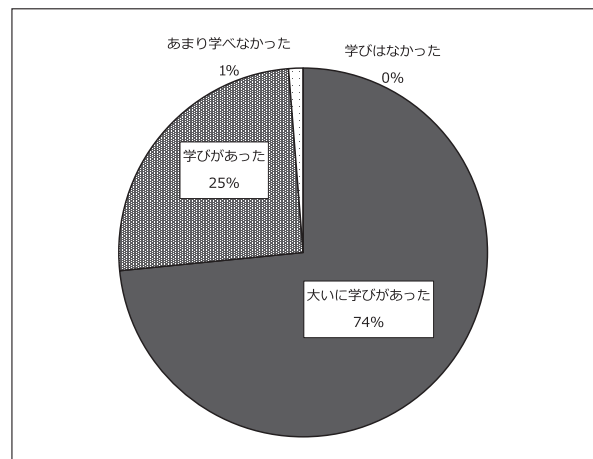


図 3 音声課題の学び n=79

3) 多重課題・計画変更時の自己の傾向 (2 択)

多重課題や、計画が追加・修正になった際の自分の心の動き、対応する際の自己の傾向について全員が気づくことができていた (図 4)。

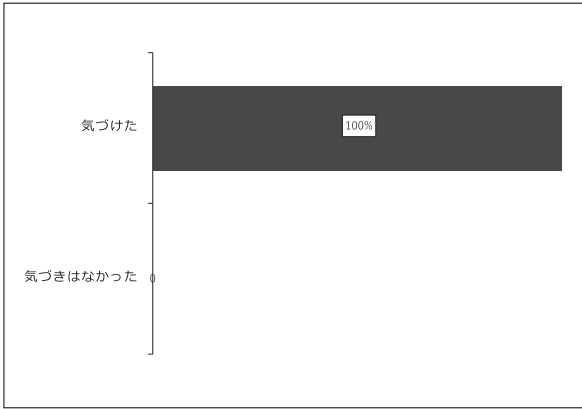


図 4 多重課題・計画変更時の自己の傾向 n=79

4) 臨床の看護を感じ取れたか (4 択)

クラスルームや、対面実習で、臨床での看護を感じ取ることが大いにできた52% (41名)、できた44% (35名)、あまりできなかった4% (3名)で、できなかったと回答した学生はいなかった(図 5)。

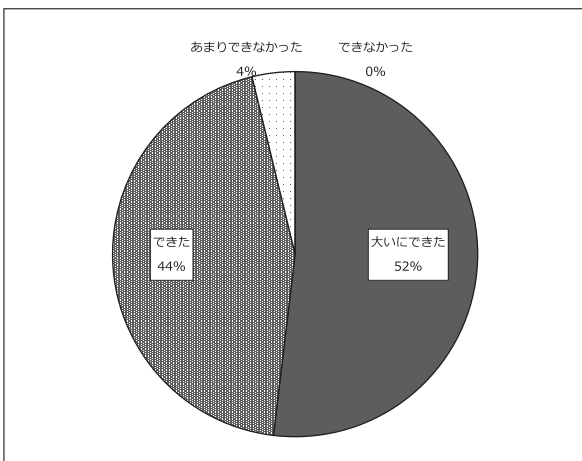


図 5 臨床の看護を感じ取れたか n=79

3. 実習の取り組み方

1) 学修課題を見つけ取り組めた (4 択)

大学での学び (知識・技術・態度等) の振り返りは、大いにできた49% (39名)、できた48% (38名)、3% (2名)があまりできなかったと回答していた (図 6)。

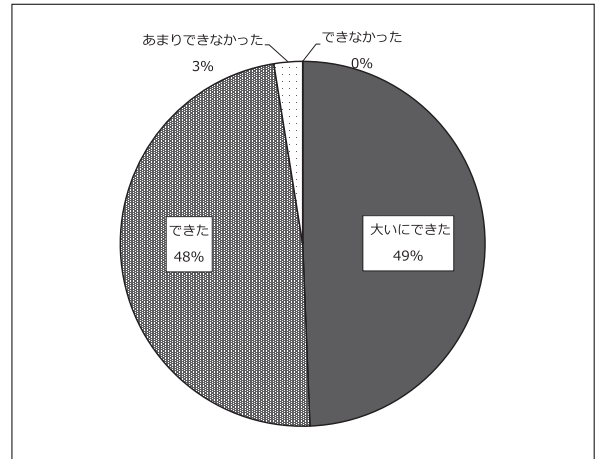


図 6 学修課題を見つけ、取り組めた n=79

2) 自分自身を振り返ることができたか (2 択)

自身の振り返りについては全員ができたと答えていた (図 7)。

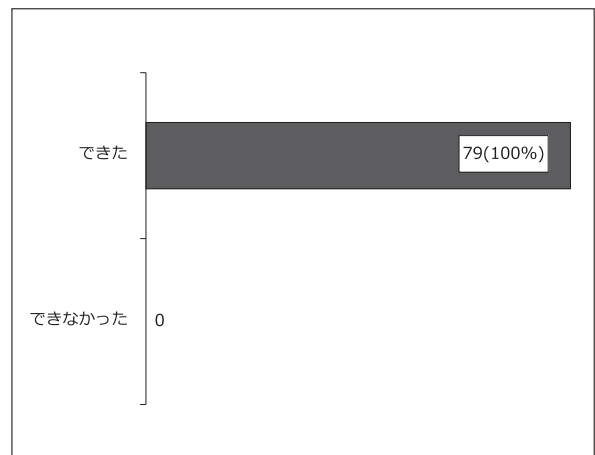


図 7 自分自身を振り返ることができたか n=79

3) 卒業後をイメージできたか (2 択)

実習を通して、卒業後の自分をイメージできた 94% (74名)、できなかったのは 6% (5名) が回答していた (図 8)。

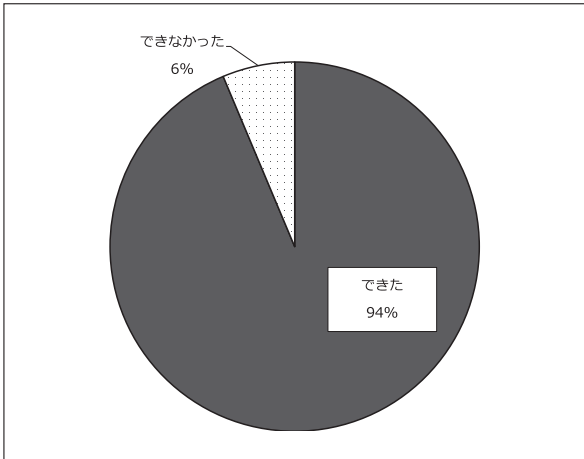


図 8 卒業後をイメージできたか n=79

4) 実習中の教員との関わり方 (4 択)

統合看護実習は、教員と関わり他者の経験を直接聞きながら、看護を考えるとところに学内実習の意義がある。学生が積極的に教員に関わったのは 15% (12名)、関わることができた 68% (54名)、あまりできなかった 15% (12名)、できなかった 1% (1名) と回答していた (図 9)。

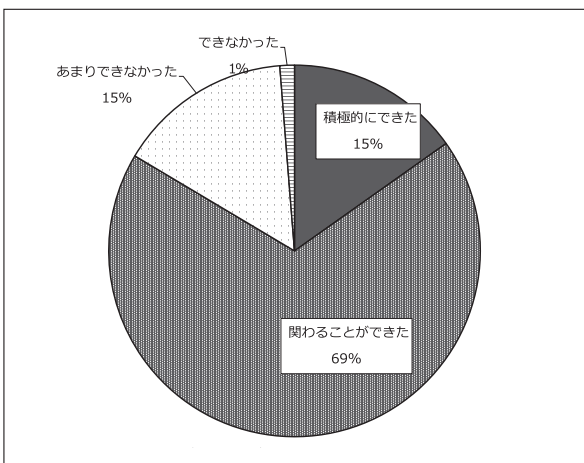


図 9 実習中の教員との関わり方 n=79

5) 自分の受講態度 (5 段階評価)

実習の受講態度は、5 点 16.5% (13名)、4 点 63.3% (50名)、3 点 19% (15名)、2 点 1.3% (1名) で、平均 3.95 点だった (図 10)。

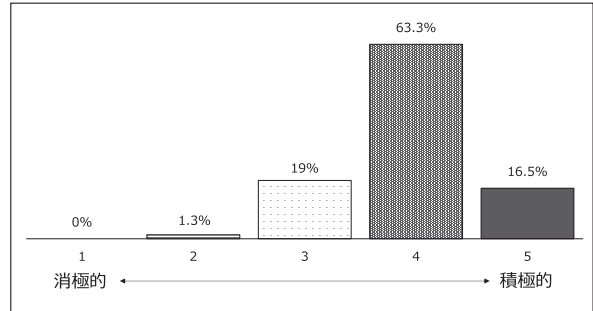


図 10 自分の受講態度 n=79

4. 実習評価

1) 実習の満足度 (5 段階評価)

実習満足度は、5 点 36.7% (29名)、4 点 57% (45名)、3 点 5.1% (4名)、1 点 1.3% (1名) で、平均 4.28 点だった (図 11)。

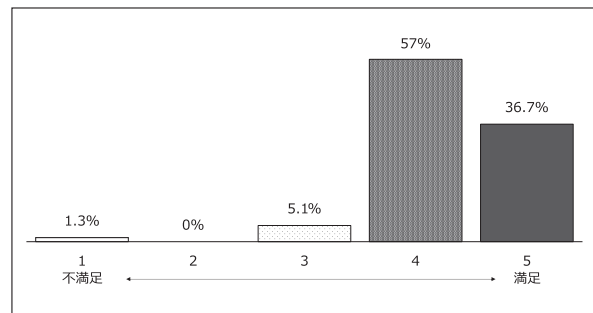


図 11 実習の満足度 n=79

2) 統合看護実習で良かった点 (自由記述)

65名から79の自由記述データを得てコード、サブカテゴリー、カテゴリー化を行った。統合看護実習の良さを42コード、26サブカテゴリーから、【他者からの学び】【看護師としての将来】【タイムマネジメント】【協働】【自己評価】【自主性】【知識の獲得】【ICTと対面で俯瞰】【教員の対応】の9カテゴリーが抽出された (表 3)。

表3 統合看護実習で良かった点

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|-----------|-----------------------------|
| 他者からの学び | 多くの経験を聞いて視点が広がった |
| | 経験談から自分の看護観を考えた |
| | 経験談は将来、困難時に役立つ |
| 看護師としての将来 | 看護師の仕事を知り将来のイメージを持てた |
| | リアルな経験から困難も乗り越えられると知ることができた |
| | 将来を見据えた実習 |
| | 臨床の状況や看護管理を学べた |
| タイムマネジメント | スケジュール管理の意味を考えた |
| | 自分に向き合って計画行動した |
| | 自分の計画、実践で達成感を得た |
| 協働 | 皆で作上げる実習 |
| | 他学生の学修を知ることができた |
| 自己評価 | 自己発見できた |
| | 臨機応変を身に着けた |
| | 具体的に考えるようになった |
| 自主性 | やるべきことを自主的に行えた |
| | 自己管理して学修した |
| 知識の獲得 | 自己学修（不足知識）の学修ができた |
| ICTと対面で俯瞰 | 対面実習の内容 |
| | ICTと対面実習で学びの俯瞰 |
| 教員の対応 | 教員に話しやすい |
| | 教員に質問でき、解決できた |
| | 常に教員がいてくれた |
| | 担当教員が統一され、良いバランス |
| | 教員が学生のために最善を尽くしていた |
| | 教員が肯定的に関わり、認めてくれた |

表4 統合看護実習の改善点

| カテゴリー | コード |
|-------------|-------------------------|
| ICT環境 | PC使える時間確保 |
| | リモート・対面を確認したほうが良い |
| | 音声聞きながら入力できるとよい |
| | PC不具合 |
| 教育環境 | 座席（真ん中立てない） |
| | 少人数で行いたい |
| | 自己学修時の環境（友達が賑やか） |
| | 教室が寒い |
| 将来の不安 | 複数患者受け持ちの不安 |
| | 複数患者受け持ちできず残念 |
| | 看護師の怖さを実感した |
| 実習形態 | 1日の課題を朝出すと良かった |
| | 皆で考える授業があっても良かった |
| 連絡事項 | 紙媒体の提出がわかりにくかった |
| | クラスルームの連絡が複数になると混乱 |
| | 変更点が紛らわしい |
| | ミーティングを短くしてほしい |
| 消毒・清掃 | 掃除の分担 |
| | 掃除のシステム |
| ソーシャルディスタンス | 人と人の距離が近い |
| | 行動報告時、人と人の距離が近い |
| 教員の対応 | 日々の姿勢でアドバイスが響かない |
| | 他学生対応していると教員に聞けない |
| | 多くの教員に教室に来てほしい |
| | 顔と名前を一致させてほしい |
| | 音声だけでは伝えたいことがわからない教員がいた |
| その他 | グループで仲の良い学生と離れると孤独 |

3) 統合看護実習の改善点（自由記述）

58名の自由記述から肯定的な意見を除き28データを得た。データは抽象度が高く、サブカテゴリーを生成せずコード、カテゴリー化を行った。26コードから【ICT環境】【教育環境】【将来の不安】【実習形態】【連絡事項】【消毒・清掃】【ソーシャルディスタンス】【教員の対応】【その他】の9カテゴリーが抽出された（表4）。

4) その他（自由記述）

45名の学生がその他に自由記述を記載していた。実習の改善点としても検討しなければならない『大学内 wifi 環境、PC 環境を充実してほしい』、『自宅でリモートできるものはリモートにしてほしい』といった ICT 活用に環境に関する要望が2件あった。

学内での統合看護実習に対しては『学生の将来

を見据えた実習で不満は一つもない』、『自分の看護観を見直すきっかけになり、モチベーションが上がった』、『実習で多くを学び考えたので目指す看護師になれるよう頑張る』、『社会人になる準備、自ら考え行動する、自分自身に向き合うことができた』と感想を述べていた。

また複数の学生が学内実習に関して、『不安があったが充実していた』『(COVID-19で)忘れられない1年になったが、それに負けないくらい良い経験を聞かせてもらえて心から感謝している』、『先生も初めての学内実習で準備が大変だったと思うが、大学生活を振り返ることができ、教員・周囲の環境に感謝する良い機会になった』と、新型コロナウイルス禍の学内実習に関する不安を感じながらも、教員に対して感謝しながら実習していたことを述べていた。

VI. 考察

1. 学内実習準備

今回、A 大学では緊急事態宣言後、学内の COVID-19対策として、入構制限等の措置を取った。そのため統合看護実習オリエンテーションを通常時期に行うことができなかった。また、4 年前期に行う他の領域実習スケジュール変更の影響から、統合看護実習日程調整に時間がかかり、学生への事前アナウンスは最小限の事項のみクラスルームで行わざるを得なかった。

今回実習した学生は、全学生 1 年前期の基礎科目必修で情報処理を 1 単位取得している。情報処理では、大学内コンピュータ室を利用し Microsoft Office[®] のソフトウェア Word、Excel、Power point の基本的な操作方法を学修している。また、履修登録や成績確認、大学からの連絡等は Universal passport[®] を利用している。しかし、学生は授業で学び、Word でテキスト入力することはできるようになっているが、コンピュータを用いることに苦手意識があった。

また、学生は COVID-19緊急事態宣言後、入構制限が段階的に解除となり 6 月以降、領域実習を

学内で行っていた。そのため、学生は ICT を活用した授業は少なく、クラスルームの利用に慣れていない状況にあった。学生の苦手意識と利用法に慣れていないクラスルームを導入するにあたり、統合看護実習前にクラスルームの使い方を事前に段階を追って確認しながら準備を整えた。学生は実習開始時に、全員がクラスルームで質問、音声再生、コメント提出等ができた。

学生の ICT 活用レディネスの把握、ICT 活用に対する不安を少なくするためには、環境を整えるだけではなく、ICT の利用方法を段階的に習得する必要がある。学内実習に ICT を活用するには、利用するツールを使えるようになることにより学び方に影響すると示唆された。

2. 学内実習進行

例年、学生は実習が始まると『実習オリエンテーション内容を忘れた』、『実習要項を見ていない』、『聞いていない』ということが多々あった。しかし、学内統合看護実習では実習中もクラスルームの掲示板や、実習要項を活用しながら、実習を進めていた。情報を自ら得るためには、何を、どのように使うかを考え、主体的に行動していたと推察できる。

3. 学内実習内容

タイムマネジメント

初日のオリエンテーションで、2 週間の実習期間内に行うべきことをガイダンスし、対面学修日時、教室以外は、自分の計画に基づいて自由に実施できることを説明した。学生は、いつ、何を、どのような順番で実施するか、追加課題が提示されても対応できるように、タイムマネジメントする意識を持つことができた。

Deci ら (1995) は「人は自ら選択することによって自分自身の行為の根拠を十分に意味づけることができ、納得して活動に取り組むことができる」と述べている。今回の実習では、学生が個々のレディネスや個人特性によって学修方法、学修計画

を自ら選択する方式をとった。学生は『自由にやれるのは最初、ラッキーと思ったが、すごく難しく奥深い。』と、自分の行動を選択する難しさと重要性を感じ、主体的な取り組みができたと言える。

知識技術の統合

学生自身が大学での学びを振り返り、自分を確認できた。実習前・中を通して、身につけていない知識(技術)を、自分に合った方法で学修を継続した。2週間の自己学修成果について最終面接時に、それぞれが自信をもって自己の学修スタイルをプレゼンテーションしていた。『きれいなノートを作る』、『参考図書に書き込みをする』、『絵に書いて理解を深める』、『ひたすら書いて理解する』など、課題を提出するためだけのレポートやノートではなく、知識を得る方法を見つけて取り組んでいた。

知識理解を深める行動はできたが、臨地実習で経験する患者との関わり、ケア提供(技術)、看護師と協働する等はできなかった。

看護技術

80名の実習であることから、技術演習については①密を回避しなければならないこと、②学内のICT環境、③学生のICTスキル、④少ない教員数等の理由から、看護技術演習はできなかった。

大島(2018)は、「看護教育がめざすものは、やはり、倫理的観点を含むよりよい看護ケアの提供ができるために、対象の方々を看護の視点から適切に判断できること。そして解決できる企画・実行、それを評価して修正していける力をつけることであろうと考える」と述べている。

今回、患者ケア実践をできなかったことは、看護の視点から適切に判断する、解決するために必要な“知識の補完”にとどまり、看護技術やコミュニケーション等の経験不足は否めない。看護技術経験は、就職後の新人看護師教育に頼らざるを得ない。

全国的に見ても2020年度看護系大学4年生の臨地実習科目実施状況では、計画通りに実施できているのは695科目のうち、わずか1.3%(13科目)であった(一般社団法人日本看護系大学協議会高等教育行政対策委員会(2020))。各大学では統合看護実習を学内対面で行う、ICTで実施する、ICTの利用状況もリアルタイム/オンデマンド、対面とICT併用など、実施状況が異なることが推察される。

臨床では、養成校毎に多様な形態で実習を経たきた新人看護師として迎えなければならない。つまり、新人看護師教育にも影響すると言え、より一層基礎教育と臨床(特に新人看護師教育)の連携強化をし、学生の卒業後の成長をサポートしていく必要性が示唆された。

他者の経験から学ぶ

初回面接に、学生自身が自己を見つめ、目標と課題を明らかにした後に面接に臨んだ。学生は、自分の経験や課題を伝え、教員からアドバイスを受けたことで、自らの行動に責任感を持って行動し、看護を改めて考えることができた。

クラスルームは学生のICT環境等を考慮し、学生間で不利益にならないよう、コンピュータ室を利用できる時間を設定した。

学生は、ICTを活用した音声であっても、身近な教員の経験談に興味をもって聞き、学びを得ていた。日ごろ授業等で接している教員が、“知識の教授”ではなく、人間として、看護師として“生の声”で“生きた経験”を話したことが、学生の心に響いていた。松尾(2011)は、「他者から学ぶ間接経験を軽視することはできません。なぜなら自分で経験できることは限られているからです。(中略)こうした他者の経験は、「自分の経験にはどんな意味があるのか」、「今回の経験から何を学ぶべきか」など、私たちが直接経験を振り返り、意味を考えるうえで貴重な情報となるのです」と述べている。

今回、学生たちは、多くの臨床看護師や教員の

経験を聞き、看護の意義や、自分がどのような看護を行っていきたいかを考えることができた。先述の松尾(2011)は「職場の同僚や先輩・上司から聞いた経験談や経験に基づいたアドバイスは人が何かを成し遂げるときの助けになっているはずです」とも述べている。学生は看護師や教員の経験から、臨床看護を想像して学び、自分の将来像を描くことができたと言える。

ICTを活用し、音声を聞き、学びを提出するという課題は、在宅で実習することも可能であった。しかし、科目責任者は学生に“対面で実習する意義を、「音声を聞いただけで終わらせないこと、経験を持つ教員が教室にいますので、どのように活用するかが重要」と説明してきた。

音声は一教員の経験だが、学生は音声を聞いた後に、感じたことを対面で教員に語ることで、より学びが深まったと考える。担当していた教員は、次々に学生に声を掛けられ、疾患等の知識、看護師としての経験、ワークライフバランス、キャリアアップなど、多岐にわたる質問を受けていた。学生は他者の経験から自己の看護観に影響を受け、臨床実践を想像し、自己の将来像に繋げていたといえる。

4. 実習評価

1) 統合看護実習で良かった点

今回の統合看護実習では、感染対策上グループワーク等を設けることはできなかった。しかし学生は統合看護実習の良さとして『このような状況の中でも皆で一緒に作り上げる実習ができて良かった』、『他の学生が、どのような方法で学修をしているかを知れて、自分の学修スタイルのヒントになった。皆のおかげで自分も頑張れた』と、他学生と協働できたとあげていた。また『オンラインで学びを得たが、それを対面で先生と話すことでさらに深まった』、『オンラインだけだと孤独を感じたと思うが対面とクラスルーム両方が良いバランスだった』とICTと対面を組み合わせることで、俯瞰しながら学びを深めていた。

今回の統合看護実習では、クラスルームの音声課題、初回面接、対面実習、実習時間に学生が質問に出向く等の内容で、22名の教員が対応した。そのうち学生指導担当教員(常時教室で指導する教員)は3名で、通常の実習時よりも少ない人数で指導を行った。しかし、学生は『多くの先生たちが自分たちのことを考え、対応してくれた』、『教員が最善を尽くしてくれていた』と教員の存在や指導が充実していたと感じていた。また、担当教員3名について『指導が統一されていて迷うことがなかった』、『肯定的にかかわってくれて、自分を認めてもらえたことが嬉しかった』と、実習時の教員対応が支えになっていたと明らかになった。

学内実習において教員指導は、学生にどのように寄り添うか、教員が学生の成長を願う熱意を伝えるかが重要であり、“対面する場”だけではなく、様々な手段を工夫で対応できることが示唆された。

中井ら(2018)は、「複数教員で授業を行う場合は授業の設計に加えて教員の組み合わせも重要です」と述べている。科目責任者は、平常時から、学科内教員とコミュニケーションをとる中で、教員の臨床経験やキャリアなど、何気ない会話から情報を得ていた。学科内教員の経験を知っていたことは、学内実習計画を立案する際に、学生の興味関心や、レディネスの状況から、教員の経験を相互補完的に活用することができた。学生にとっても、学科内の教員の経験が臨床経験を垣間見る効果的な学びにつながったと言える。

2) 学内実習の改善点

学内での統合看護実習改善点は、学生が使える学内環境、特にICT環境の整備が必要である。

学生は、複数患者受け持ちを通して学びを深めたい気持ちを持っていたが、学内では経験することが難しく、『このまま臨床にでも大丈夫だろうか』と【将来の不安】に繋がっていた。

臨地実習で数週間複数患者受け持ちを経験した

からといって、複数患者受け持ちが即座にできるわけではない。患者ケアや、複数患者への対応は経験しながら実践力を養う必要がある。加えて、新型コロナウイルス禍で実習をしなければならなかった学生は、臨床実習経験不足、学生自身の不安があり、実習中だけではなく、実習終了後も丁寧に学生指導を続ける必要があると言える。

医療安全の一環として、COVID-19対策を位置付け、大学で定められた換気・清掃の方法で実施していた。学生個々で、感染対策（健康状況チェックや、手洗い、手指消毒、うがい等）や机等の消毒は個別に徹底した。責任グループを決め、教室の入れ替え時、1日の終了時の最終責任をグループ当番制で行った。

実習開始当初、環境整備の責任グループ人数が多く“他学生任せ”になる等、責任の所在が不明瞭となった。実習数日後より、『今日は自分が残るので最後点検します』と自主的な行動や、役割分担する姿が見受けられた。当初は混乱しても、学生自身が解決する力を持っていたと言える。学生は、『教員に言われたからやる』『言われたことだけをする』という考えから、自ら考え、工夫し、行動するようになっていった。教員は、学生の主体的な行動を促し、いかにサポートするかが重要だと考える。

学生は教員に相談したいと思っても、自らアクション出来る学生とは限らず、待っている学生がいたことも明らかになった。通常の実習では少人数の学生グループに、担当教員が指導しているが、今回は80名を3名の担当教員で対応していたため、『教員に声をかけてもらえるのを待つ』『教員に聞きたいことがあっても他学生対応が終わるのを待つ』学生も存在した。学内実習時に適切な教員配置は、課題が残る。また、教員として学生の顔はわかるが全員の氏名をフルネームで覚えて接することができなかった。学生からも、『名前と顔を一致してほしい』と回答があり、看護は個人を大切にすることからも、課題が残った。

5. 学内統合看護実習総括

学生の統合看護実習の受け止め方

学生は臨地で実習できない不安、『“コロナ世代”と呼ばれ、実習できていないことはわかっている、就職後にこんなこともできないのか？といわれるのではないかと不安もあったが、予想を遥かに超えたやり方で、いろんなことをたくさん学べた』、『この実習でなければ解決できなかったことがたくさんあると思った』と肯定的に学内実習をとらえていた。

ICT 活用

厚生労働省(2019)の看護基礎教育検討会報告書により、2022年新入生から看護基礎教育内容の変更が適用される。「情報通信技術 (ICT) の発展により、看護基礎教育においても ICT を活用するための基礎的能力が重要」と、ICT を活用する能力強化を打ち出している。新型コロナウイルス禍という状況で、実習目的を達成するために、行ったクラスルームを利用した実習により、ICT 活用能力が強化されたと言える。

実習計画

臨地での統合看護実習を学内実習に変更する前例がなく、実習計画においては臨床の看護管理者から意見を聞いて、実践的な計画を立案した。

学生の学びを促すために、実習計画は Keller (2009, 2012) の ARCS - V モデルを参考にした。いかに注意をひくか、興味持つか (Attention) という側面では、新人看護師 (3月に卒業した先輩) の話を聞き、実習が臨床につながることを意識付けた。

実習が価値ある経験、目的を達成することは自分の将来にどのように役立つか (Relevance) は、多様な臨床実践を聞き、自らも実習経験を話せるような時間を持った。

自分の学習に自信を持ち成功への期待を持たせる (Confidence) は、個別の面接時間を取り個々の成長を教員と学生が共有し、承認することで自

分の学習に自信を持ち、さらなる課題に取り組んでいった。

学内実習に満足感を得るために (Satisfaction)、教員間で統一し公平に対応する、教員の意図を伝え、成長につながっていることを学生自身が感じるようにした。

自らの行動に責任を持つこと、与えられた学修をするだけでなく意志をもって自分で選択し、実行すること (Voition) を促すようにした。設定されている対面実習の時間以外は、学生がある程度自由に場所 (学内の複数個所)、内容を実施できるように設定した。学生は“自由”には責任が伴うことを痛感しながら、自らの意志で行動を決めることができた。

本来の目的を達成できるよう実習時期の検討、実習要項を修正、記録用紙の修正、初回面接準備、教員間の理解を促す調整、評価方法等を検討し、計画・実践した。特に評価は学生に不利益が生じないよう、最終面接は科目責任者が全学生と個別面接を行った。学生は大学最後の実習が学内になったことで、卒業後の自分に対し危機感をもって、主体的に臨んでいた。

統合看護実習の目的を変更せずに対面と ICT 活用し実施できたことは、①実習計画、②学生の危機感、③学生の主体的な取り組み、④多くの教員が音声・面接を担当したことにより可能になったと言える。

VII. 結論

学内での統合看護実習であっても、対面と ICT 活用を併用し、目的を変えずに実習を行った。教員の持つ実践経験を活かし、臨床を想起する教育を行うことができた。学生は自らの意思で学ぶ姿勢を示し、自らが主体的に取り組み、大学生活を総合的に振り返り、目標と課題を明らかにして行動した。一方、看護技術や、コミュニケーション等、臨床経験不足は否めない。医療機関とコロナ禍の実習方法並びに、継続教育について連携強化する必要性が示唆された。

VIII. 研究の限界と今後の課題

学内実習は臨地実習での経験を完全に再現できるものではない。本報告は統合看護実習直後の学生アンケート結果であり、学修効果を測定するには限界がある。

学生は学内統合看護実習に満足感・達成感を得ただけではなく、自己課題を述べていた。今後、学生の課題に対する取り組みを、継続支援する必要がある。

謝辞

学内での統合看護実習に当たり、アドバイスいただいた臨地実習施設の看護部の皆様、音声収録にご協力いただきました皆様、卒業生に感謝申し上げます。

東北文化学園大学医療福祉学部看護学科 板垣学科長はじめ学科教員、統合看護実習履修学生に感謝いたします。

IX. 参考文献

- 浅香えみ子 (2011), 基礎教育と卒後教育の連携—シームレスで実践的な看護教育をめざして, 看護管理, 医学書院, 21 (5), p 378-383
- 吾妻知美, 筒井佳澄, (2019), 看護マネジメント実習にアクティブラーニングを取り入れた効果, 京都府立医科大学看護学科紀要, 29, p 21-27
- Deci, E.L., Flaste, Richard. (1995) / 桜井茂男 (監訳) (1999). 人を伸ばす力, 新曜社, 東京, p45
- 福井恵子, 鶴川義弘, 上山由香 (2016), Google Classroom を活用した授業の提案, 宮城教育大学情報処理センター研究概要, 23, p 57-62
- 平岡齊士, (2020), 関 g のきゅいくにおけるオンライン授業の作り方と教授法, 看護教育, 61 (8), p 724-732
- 一般社団法人日本看護系大学協議会高等教育行政対策委員会 (2020). 2020年度看護系大学 4 年生の臨地実習科目 (必修) の実施状況調査報告書.
<https://doi.org/10.32283/rep.598a3d11>
- Keller, J.M (2009) / 鈴木克明 (監訳) (2010) 学習意欲をデザインする - ARCS モデルによるインスト落書なるデザイン, 北大路書房, 京都
- Keller, J.M (2012), Stimulating Learner Motivation : Applying ARCS-V Model in Nursing Education, 日本看護学教育学会第22回教育講演資料, 熊本
- 厚生労働省 (2007). 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書, 16.19.

- 厚生労働省 (2019). 看護基礎教育検討会報告書, p9
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>
- 厚生労働省 (2020) 新型コロナウイルスに関連した患者等の発生について (10月5日各自治体公表資料集計分).
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_13959.html
(2020.10.6 検索)
- 厚生労働省 (2020) 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について事務連絡 (令和2年2月28日)
<https://www.mhlw.go.jp/content/000603666.pdf>
- 奥野信行 (2019), 臨床と基礎教育の間の「ずれ」を埋めるための連携, 看護教育, 60 (11), p 930-935
- 小山真理子 (2012). 今、改めて看護基礎教育カリキュラムの統合実習を考える, 看護展望, 37 (2), p 6-14
- 眞鍋えみ子, 倉ヶ市絵美佳, 橋元晴美, 今村浪子 (2011), 教育と臨床の協働による看護実践能力向上への取り組みー循環型教育システムによる看護師育成プランの紹介ー, 京都府立医科大学雑誌, 120 (10), 793-800
- 松尾睦 (2011). 職場が生きる人が育つ「経験学修」入門, ダイアモンド社, 東京, p 48-51
- 三上剛人, 藤野智子. (2017). 多重課題クリアノート, 学研メディカル秀潤社, 東京
- 中井俊樹, 服部律子, (2018), 授業設計と教育評価, 医学書院, 東京, p 56-58
- 新実絹代, 草間朋子 (2019) 看護基礎教育と新人看護職員研修のシームレスな連携に向けて「看護管理学」教育に関する提案, 看護教育, 58 (10), p 832-839
- 西村礼子, (2020), オンライン教育の基本と実践, 看護教育, 61 (8), p 498-511
- 西尾ゆかり, 太田節子, 藤野みつ子, 餅田敬司他, (2007), 統合看護学実習Ⅱ (看護管理) で得られた看護学生の学び, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 5 (1), p 58-63
- 大島弓子 (2018), 「統合実習の内容と発展を振り返る, 看護教育, 医学書院, 59 (9), 774-779
- 小野麻由子, (2014) 看護基礎教育終了時のキャリアビジョンに影響する統合実習の学び, 日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要, 19, 35-43
- 鈴木寛, (2016), Google Classroom でできること, 八戸工業大学紀要, 35, p 107-120